

柳宗元における仏教受容の一齣

河 内 昭 圓

「佛骨を論ずるの表」を書いて仏教を排撃したことで知られる韓愈（七六八～八二四）は、その友人である柳宗元（七三三～八一九）に対しても、彼の親仏教的思考のありかたを批難したことがあった。韓柳と并称されて、古文復興という文学観のうえで共通した一面を持ちながら、一方では当時盛んであった仏教に対して、両者は相対立する意見を持っていたのである。

この韓・柳対立の様子を柳宗元の「僧浩初を送るの序」^①は次の如く伝えている。

「儒者韓退之と余と善し。嘗て余が浮圖の言を嗜むを病り、余が浮圖と遊ぶを警る。近ごろ隴西の李生礎東都より来る。退之また書を寓せて余を罪む。且つ曰く、元生を送るの序を見るに、浮圖を斥けずと。」

韓愈がいつどのような形式で最初に難詰したのかは考す

べきもない。また、このとき韓愈が柳宗元に与えたという書も、現在「韓昌黎集」に見えず、内容の詳細を知ることができない。しかし右の文から、韓愈の難詰が再度にわたっていたこと、二度目の難詰の理由が、柳宗元が「元十八山人の南遊するを送るの序」^②の中で仏教を排斥しなかった点にあること等明らかである。

かく儒者韓愈によって難詰されねばならなかった柳宗元が信奉した仏教とは、どのような環境のもとで育まれたものであろうか。以下この点について考えるところを述べてみたい。

一

柳宗元の生涯は、生を受けてより所謂王叔文事件^③に連坐して永州（湖南省零陵県）司馬に左遷されるまでの長安時

代と、永州左遷以後の地方生活時代と、大きく二つに区分される。

長安時代、柳宗元は貞元九年(七九三)に二十一歳の若さで進士に及第し、同十四年(七九八)二十六歳のとき博学宏詞科にも第せられて、集賢殿書院正字の職についている。さらに貞元十七年(八〇一)藍田尉、同十九年(八〇三)監察御史裏行、同二十一年(八〇五・なおこの年八月永貞と改元)尚書礼部員外郎と歴任し、官界での順調な歩みを示した。ときに三十三歳のことである。

この時期にすでに仏教への関心を示していたことを、柳宗元自身は「巽上人の中丞叔父の召に赴くを送るの序」^④で次の如く述べている。

「吾幼^{おなき}より仏を好む。其の道を求めて、積むこと三十年。」

巽上人は永州の龍興寺に居住した僧であるので、この文章は柳宗元が永州に在住した三十三歳から、柳州(広西省馬平県)刺史に量移された四十三歳までの作である^⑤。されば、まさに幼年の頃から仏教に親しんでいたことになる。

このほかに「永州龍興寺西軒記」^⑥で、やはり仏教を知って久しきにわたっていることを、繰返し述べている。

「永貞の年、余の名黨人に在り。尚書省に容れられず。

出だされて邵州と爲り、道に永州司馬に貶せらる。至れば則ち以て居と爲す無く、龍興寺東序の下に居す。余釋氏の道を知りて且つ久し。固より願う所なり。」

永州に左遷されたとき、住むに適當した家が無く、龍興寺に仮住いしたが、古くから仏道をよく知っていたので、それは、決して厭う所ではなかった、と柳宗元はいうのである。

當時は慧能禪師(六三八〜七一三)の出現をみた後であり、武宗の会昌の廃仏(八四二〜八四五)よりも以前であって、仏教のきわめて盛んな時期であった。したがって、様々な形で幼年の柳宗元の周囲にも、仏教が存在したのであろう。しかし、「釋氏の道を知りて且つ久し」くあっても、「其の道を求めて、積むこと三十年」は少しく誇張された表現であると思われる。幼少年期の柳宗元に最も大きな影響を与えたと思われる彼の家族を見わたすとき、そこに仏教を信奉した事実を見出すことは、はなはだ困難なことだからである。

例えば、柳宗元はその父柳鎮(七三八〜七九三)のために「先侍御史府君神道表」^⑦を書いている。それによれば、柳鎮は明経科出身の儒家であった。安祿山の乱(七五五〜七六三)に遭遇するや、柳鎮は一族をひきつれ、藏書三千卷を

持って王屋山(山西省垣曲東北)に難を避け、食糧に窮しながらも、一族の子弟に「春秋左氏傳」「周易」を講義をすることをもって楽しみとしていたという。しかし、仏教をも兼修したという記載はないのである。柳宗元はこのほかに「先君石表陰先友記」を書いて、柳鎮が交わりを持った六十七人の名を録したが、ここにも僧徒の名前は見あたらない。すなわち、柳宗元がしたためた柳鎮の行状からは、柳鎮が仏教に親しんだ形跡を全く見出すことができないのである。したがって、柳宗元が仏教の影響をその父から受けたことは、ほとんどなかったものと思われる。

また、柳宗元は母親盧氏のために「先太夫人河東縣太君歸祔誌」を書いてゐる。それによれば、七歳にしてすでに「毛詩」・劉向の「列女傳」に通じ、柳鎮に嫁しては旧史及び諸子の書を聞き覚えていたという。頭脳明哲にして深い教養を身につけた人であったことが認められる。柳宗元は四歳のとき(七七六)この母親から古賦十四首を教えられた。このとき柳鎮は呉(江蘇省)に在って、家に書物がなく、ことごとく盧氏が諷んじていたものであるという。しかしこの人についても、信仰を持っていたとか、經典に通じていたというような記載はなく、仏教に関連した記事は、ただ次の如く記しているにとどまる。

「元和元年、歲次丙戌、五月十五日。代を永州零陵の佛寺に棄つ。」

右の文から、盧氏が仏寺内で臨終を迎えたことを認め得るが、この「仏寺」とは、柳宗元が永州へ貶謫されたとき仮住いをしていた龍興寺のことで、直接盧氏の仏教帰依の立場を意味するものではない。

やはり、柳宗元の仏教への傾斜は、彼自身が異上人を送る序で述べた年令よりも、もう少し後まで、すなわち彼が外部との接触を頻々に持つようになるまで、待たねばならぬように思われる。

二

柳宗元は仏教に関心を持つに至った動機を、その文集に明らかにしていないが、わずかばかりの手がかりをもとにして推察すれば、なんらかの形で仏教的影響を与えたと思われる人物が、二三浮かびあがる。妻の楊氏とその父の楊憑、さらに友人の劉禹錫とがそれである。

柳宗元は二十四歳のとき(七九六)礼部郎中楊憑(八一七)の娘を嫁として迎えるが、この楊氏の家ではしばしば仏事が営まれていたようである。「亡妻弘農楊氏誌」はその間の事情を次の如く伝えている。

「楊氏」五歳。先妣の忌に僧を仁祠に飯するにあい、就ち其の故を問う。嫁傳以て告ぐ。遂に號泣して食わず。のち是の日に及ぶ毎に、必ず遑遑として涕慕し、終身の戚を抱けり。」

人間の死と僧との結びつきが、幼時の楊氏の記憶に深く印象づけられていたこと、また、柳宗元はそれを彼女のための「墓誌」に書きとどめねばならぬほど重大な事柄として考えていたことなど、右の文に認められる。

楊家が仏教を信奉していたことは、その主楊憑が、柳宗元が後に「石碑」を書いた無姓和尚と親交を持っていたことによって一層明白である。

無姓和尚は岳州（湖南省岳陽県）聖安寺に住した僧で、生卒年、姓名など詳しくしない。「法華経」「金剛般若経」を読誦し、天台大師をもって仏説を体得した者と解していたという。この無姓と楊憑との交渉を、「岳州聖安寺無姓和尚碑」の「碑陰記」には次の如く伝えている。

「京兆の尹弘農の楊公某、其の隠地を以て道場と爲す。」この文は、前後に無姓と交渉を持った名士の姓名と、交渉のありかたとを列挙しているが、ここで「京兆の尹弘農の楊公某」とは、元和四年（八〇九）京兆の尹となった楊憑のことである。彼は自らの隠地を道場として提供したと

いう。無姓和尚をひとかたならず信奉していたといわねばならぬ。

先にも述べた如く、柳宗元は貞元十二年（七九六）二十四歳で楊氏を娶るが、その婚約は七年前にさかのぼってなされている。楊憑との交際も、その頃から始まっていたであろう。されば、右の「岳州聖安寺無姓和尚碑」並びに「碑陰記」が、楊憑の要請にもとづいて制作されたことを考えるとき、それがたとえ後年のできごとであったとしても、このことから、楊憑の長安時代における柳宗元に対する仏教的影響は、少なくなかったであろうと推察されるのである。

さて、劉禹錫（七七―八四三）は柳宗元の無二の親友である。双方に詩文の往復は多いが、「元嵩師を送るの序」^⑧は両者の交渉の一面を伝えて興味深い。

「中山の劉禹錫、明信の人なり。人の實を知らずんば、未だ嘗て言わず。言いて未だ嘗て讎らざんばあらず。元嵩師武陵に居りて年數有り。劉と遊わりて久しく且つ暱し。其の詩と引とを持ちて来る。余これを視るに、申申たる其の言、勤勤たる其の思、其れ知りて言を爲すや信なり。」劉禹錫はたしかなおとずれをする人である。いまその詩と引とを持たせて元嵩師を紹介してきた。かくの如き書き

出しではじまるこの文は、以下に、私が元嵩師の人となり
を觀察してみるに、世に横行する輩とことなり、孝心豊か
な立派な人格の持主である。劉禹錫のたしかさにはいまさ
らながら感じいった、という意味のことが書き続けられて
いる。

この文は柳宗元の永州左遷以後に書かれたものである
が、二つの興味深い問題を含み持っている。一つは相互信
頼の深さを知らしめられることと、^⑤いま一つは、劉禹錫に
よって僧元嵩が柳宗元のもとへ紹介されている事実であ
る。

柳宗元の劉禹錫に対する信頼は、もとより長安時代につ
ちかわれていた。貞元九年（七九三）かれらが同時に進士
に及第していること、また同じく施士句（七三四〜八〇二）
に師事していたこと、さらに政治的にも同じ方向をたど
り、王叔文の政治集団に参加し、躍進し、王叔文の失脚と
同時に地方に貶謫された事実等、この時期に両者がめだつ
て行動を共にしていることが、そのことをものがたってい
る。

僧徒が劉禹錫から柳宗元に紹介されている例は、この元
嵩のほかに、これもやはり永州左遷以後のことではある
が、あと一件指摘しうる。

すなわち、柳宗元に「方及師を送るの序」^⑥があつて、方
及なる僧徒も柳宗元と交游を持った一人に数えうるが、劉
禹錫に「僧方及南して柳員外に謁するを送る」^⑦があり、方
及がはじめ劉禹錫のもとに一歳とどまり、後柳宗元のもと
へ紹介されていた僧であることが認められる。

さらに浩初なる僧についても、劉禹錫に「海陽湖、浩初
師に別る」^⑧、柳宗元に「僧浩初を送るの序」^⑨、「浩初上人と
同に山を看、京華の親故に寄す」^⑩、「浩初上人、絶句の仙人
山に登らんと欲すを貽らる、因りて以てこれに酬ゆ」^⑪等が
あつて、浩初が両者に共通して交游を持った僧であること
が明らかである。

これら元嵩、方及、浩初の三名の僧徒は、名品を残して
後世に名の知られる作家とはなり得なかつたが、しかし
ずれも劉禹錫、柳宗元などの文人に才能を認められた詩僧
であつた。当時詩僧が文人から文人へ紹介されることは、
市原亨吉氏が靈徹の例を挙げて、この詩僧がまだ無名のと
きに、皎然から包佶に、包佶から李紆に紹介され、当時
「包季」と併称されて、文壇に君臨していたこれらの人々
によつて、靈徹の名が揚ったことを指摘されているごと
く、^⑫かなり普遍的に行なわれていたことであるが、ここに
おける場合、劉禹錫が元嵩、方及の二詩僧を柳宗元に紹介

していることに興味もたれる。劉禹錫がきわめて早い時期に詩僧と交游を持っていて、この件に関しては、明らかに柳宗元をしのいでいるからである。

この点について、劉禹錫は「澈上人文集序」で次の如く述べている。

「初め上人、呉興に在りて何山に居り、晝公と侶を爲す。時に予方めて兩鬢を以て筆硯を執り、其の吟詠に陪す。皆曰く、孺子教う可しと。」

ここで「晝公」とは、謝靈運十世の孫といい、「杼山集」十巻を残した詩僧皎然(七三〇～七九九)を指す。劉禹錫はこの皎然と靈徹(七四六～八一六)の二詩僧から詩を学んだことがあったのである。しかも「兩鬢」といい「孺子」という。その時期はまさに幼年の頃であった。後に述べる如く柳宗元に「韓漳州の書、徹上人の亡を報ず、因りて二絶を寄す」詩及び「徹上人の亡を聞き、侍郎楊丈に寄す」詩^⑤があつて、柳宗元もまた長安時代に靈徹と交游を持っていたが、この人の少しく成長した後の交游を思わしめるのに對して、劉禹錫のそれは全く先行していたといつていい。

靈徹は劉禹錫の「序」によつても知られる如く、すでに、若い劉禹錫に詩作を指導するまでになっていた人であり、柳宗元も若くして文名を高めていた人である。両者が

どのような機会を得て知己となつたかを知ることにはできないが、文人としての社交の場で、あるいはなるべくして知己となつたのであろう。したがつて、劉禹錫が靈徹と早期に交游を持っていたという一事をもつて、柳宗元と靈徹との交游の機会は、劉禹錫に負うところがあつたと考えることはもとより早計に過ぎるが、ただ、さきに述べた如く元嵩、方及の二詩僧が劉禹錫によつて紹介されている事実と考へ併せるとき、この種の僧徒との交游に関して、劉禹錫からの強い働きかけがあつたことは否めない。

三

以上述べてきたように、長安時代、柳宗元は仏教隆盛の社會を背景としながら、身近に楊氏一族の信仰を通じての仏教と、あるいは劉禹錫が介在したであろうところの、文學を通じての詩僧との交游による仏教とを、その環境として持っていた。

しかし、官界でのめざましい活躍をしていた時期には、どちらかといえば、信仰を主体にした交わりよりも、社交の場で詩僧達と交渉を持つことの方に傾斜していたものと思われる。「文暢上人五臺に登り、遂に河朔に遊ぶを送るの序」^⑥はこの間の事情を説明する作品である。

「昔の桑門の上首は、好んで賢士大夫と遊ぶ。晉宋以來、道林・道安・遠法師・休上人有り。其の與に遊ぶ所のものは、則ち謝安石・王逸少・習鑿齒・謝靈運・鮑照の徒なり。皆時の選^{すべしひと}なり。是に由りて眞乗の法印と儒典と並び用いらる。而して人嚮うところを知る。」

このような書き出しではじまる「序」は、以下に文暢の仏教者としての人となり述べたのち、次のようにつけられる。

「天官の顧公・夏官の韓公・廷尉の鄭公・吏部郎中の楊公劉公は、安石の徳・逸少の高・鑿齒の才有り。皆上人に厚く、而して其の道風を襲ぐ。佇立瞻望して、往きて返らざることを懼る。吾が輩常に靈運・明遠の文雅を希えり。故に詩して之に序す。」

昔の高僧支道林・道安・慧遠・恵休は、謝安石・王逸少・習鑿齒・謝靈運・鮑照らの、時にすぐれた人々と交遊を持っていた。今、高僧の文暢上人が去るにあたって、謝安石の仁徳・王逸少の高志・習鑿齒の才能の如きを備え持った人々が、上人の再び帰ってこないことを懼れて別れを惜んでいる。そこで謝靈運・鮑明遠の文雅を希っている私が、詩をつくり、序を書くことになったと柳宗元はいふ。

この「序」は貞元十九年(八〇三)春に作られたもので、

「柳河東集」でみるかぎり柳宗元が永州左遷以前に書いた仏教に関連する文の中で唯一の作品である。したがって柳宗元の長安時代における仏教に対する考えを知るうえで、貴重な資料であるが、それにしても、なんと六朝を懐古する気持の強くあらわれている文であろう。柳宗元を含む文人達と文暢との交遊を六朝人に擬しているのである。近く寛文生氏に「柳宗元詩考」があり、氏は中で、柳宗元が常々謝靈運・鮑照の文雅を希っていたという一文を取りあげ、彼がこの言葉通り実際に謝靈運の文学的影響を受けていたということに関する詳しい研究がある。いま氏に従い、柳宗元の文学観が六朝人謝靈運と深いつながりを持つものであるとすれば、この「序」における六朝を懐古する気持の強いあらわれは、粉飾のすくない、真実に近い姿であると思われる。

すなわち、文暢上人との交遊は、彼の求道的精神から端を発したというよりも、むしろ、謝靈運・鮑照の文雅の中に自己の文学観を見出していた柳宗元が、六朝人が持った文学的集団を模擬したところに、その主たる目的があったのである。^⑤

このような柳宗元の強い六朝懐古の情を裏づける例として、以下に前の章で触れた靈徹に関する詩三首を挙げてお

こう。

「韓漳州の書、徹上人の亡を報ず、因りて二絶を寄す」の一は次の如くいう。

早歳京華聽越吟

早歳京華に越吟を聴く

聞君江海分逾深

聞くならく君江海分つこと逾々深

きを

他時若寫蘭亭會

他時若し蘭亭の会を写さば

莫畫高僧支道林

画くなし高僧支道林

劉禹錫の「澈上人文集序」によれば、靈徹は字は源澄、会稽（浙江省紹興県）の人である。貞元中、京師に遊んで名を輩下にふるったという。柳宗元はこのとき徹上人と交遊を持った経験があったのである。劉禹錫の「序」は徹上人が元和十一年（八一六）宣州開元寺に七十一歳で終ったことを伝えているから、柳宗元の右の詩はその時に作られたものである。すでに永州司馬から柳州（広西省馬平県）刺史に量移されていて、晩年近くなっていた柳宗元が、依然として六朝への憧憬を持っていたかどうかは別として、長安時代の交遊の様子が、六朝を回顧しながら持たれていたものであることを、よくものがたっている。

また、「徹上人の亡を聞き、侍郎楊丈に寄す」には次の如くという。

東越高僧還姓湯

東越の高僧還姓は湯

幾時瓊珮觸鳴璫

幾ばくの時ぞ瓊珮触れて鳴璫たる

空花一散不知處

空花一たび散じて処を知らず

誰采金英與侍郎

誰か金英を采りて侍郎に与えん

徹上人は劉宋の恵休上人と同じ湯姓であった。恵休と交遊のあった鮑照が侍郎であった如く、徹上人と交遊のあった侍郎の楊於陵に哀悼の詩を寄せたのである。前の詩と同じく、上人の亡くなったことを悼み、往昔の交遊をいかにも楽しみ多いものであったとふりかえっているが、その楽しみとするところは、やはり六朝の雰囲気の中にあつたのである。徹上人と自分とを、決して求道的な関係においてとらえてはいない。「韓漳州の書、徹上人の亡を報ず、因りて二絶を寄す」のあと一首の詩を見てもそれは明らかである。

頻把瓊書出袖中

頻りに瓊書をば袖中より出し

獨吟遺句立秋風

独り遺句を吟じて秋風に立つ

桂江日夜流千里

桂江日夜千里を流れ

揮淚何時到甬東

揮いし涙は何れの時ぞ甬東に至る

「瓊書」に書かれていたものは上人の遺した詩であった。仏教の教理ではない。あくまでも文学的な関係において、靈徹との交遊は回想されるのである。

四

永貞元年(八〇五)十一月、柳宗元は永州司馬に左遷された。はじめ九月に礼部員外郎から邵州(山西省垣曲県)刺史に遷され、まだ任地に着かないうちに、この職を命ぜられたのである。しかも彼は、その後元和十年(八一五)三月に柳州刺史に改められるものの、中央の政治機構へは復帰できないまま生涯を過ごした。永州左遷は柳宗元にとって一大転機であったといつてよい。彼は永州の風土が、およそ文化人の住むに適した所でないことを述べているが、その荒涼としているばかりでなく、不気味でさえある永州に長くどまらねばならなかったのである。すでにそこには長安での優雅な生活はなく、彼の教養をもってともに語りあえる文化人とても、たまにこの地を過る人を除いてはない。必然的に山水を跋涉し、一人文学でもするより外に仕方なかったのである。左遷された身の憂愁と怒りとを胸一杯に抱きながら。

このような永州での日日の中で、彼の周囲において唯一の文化であった仏教に対して、認識を深めたことは、当然であつたろうと思われる。先に少しく引用した「永州龍興寺西軒記」には次の如くその変化が窺える。

「永貞の年、余の名黨人に在り、尚書省に容れられず。出だされて邵州と爲る。道に永州司馬に貶せらる。至れば則ち以て居するなく、龍興寺西序の下に居す。余釋氏の道を知りて且つ久し。固より願う所なり。然れども余が庇う所の屋甚だ隱蔽。其の戸北嚮して、居は昧昧たり。寺の是の州に居すること、高きを爲す。西序の西、屬りて大江の流に當る。江の外、山谷林麓甚だ衆し。是に於て西墉を鑿ちて以て戸と爲す。戸の外に軒を爲り、以て羣木の杪に臨む。矚せざる無し。席を徙さず、几を運ばずして、大觀を得。夫の室、嚮者の室なり。席と几、嚮者の處なり。嚮や昧にして今や顛。豈異物ならんや。因りて夫の佛の道、以て惑見を轉じて眞智と爲し、羣迷に即きて正覺と爲し、大闇を捨てて光明と爲す可きを悟る。夫の性豈異物ならんや。孰れか能く余が爲に大昏の墉を鑿ち、靈照の戸を開き、應物の軒を廣むる者ぞ。吾將に與に徒と爲らん。遂に書きて二を爲り、其の一はこれを戸外に志し、其の一以て異上人に貽る。」

柳宗元は、昧昧たる自分の部屋が、わずかばかりの工夫によって、明るく眺望のよい部屋に変じた如く、昧昧たる自分の心が、仏教によって明るさが取りもどされるような期待を持った。そして仏教を自分の心にもたらす媒介者の

役を、巽上人に期待した。失意の中で、胸裏をかけめぐる「惑見・羣迷・大闇」を、「眞智・正覺・光明」に転化するものとして仏教を認識したところに、柳宗元の求道心を見出すことができる。「孰れか能く余が爲に大昏の壙を鑿ち、靈照の戸を開き、應物の軒を廣むる者ぞ。吾將に與に徒と爲らん。」とは、苦悩からの救いを求める絶叫にほかならないのである。柳宗元が仏教を直視したのは、じつは、このときが最初ではなかったか。

ところで、巽上人は柳宗元の「南嶽雲峯和尚塔銘」によれば、雲峯大師法證の弟子で、重巽という。^⑥永州龍興寺に住し、禅の奥義をきわめて、淨土念仏をも兼修した僧である。柳宗元は「巽上人の中丞叔父の召に赴くを送るの序」で、おしめない賛辞をもって、その人となりを次のように伝えている。

「世の言う者罕に能く其の説に通ず。零陵に於て吾獨り焉を得る有り。且つ佛の言、吾得て之を聞くべからず。其の世に存する者、獨り其の書を遺すのみ。其の書に於て之を求めずんば、則ち以て其の言を得る無し。言すら得べからず。況んや其の意においてをや。今是れ上人其の書を窮め、其の言を得。其の意を論じては、推して之を大にし、萬言を逾えて煩せず、惣べて之を括り、片辭を立てて遺さ

ず。夫の世の章句を析ちて文字を徴し、至虚の極を言え、則ち蕩にして守らず、羣有の影を辯ずれば、則ち泥にして皆存する者と、其れ以て遠からずや。」

重巽は仏説の真髓を体得したまれに見る高僧の一人である、と柳宗元は讃嘆する。そして、この「序」は以下に三名のすぐれた士大夫の名を挙げ、「中丞公の直清嚴重、中書の辯博、常州の敏達を以てすら、猶其の道を宗重す。況んや吾の昧昧たる者においてをや。」と重巽への信奉を示すのである。

しかし、この「序」には重巽が詩歌をよくしたというような記載はない。長安時代に交游を持った文暢・靈徹が、いずれも文学を通じて知り得た人々であるのに対して、その交游のありかたが、龍興寺に仮居したという受動的なものであったとしても、真に仏教を通じての交わりであった点に注意しなければならない。「進士王參元の失火を賀するの書」で「僕近く亦作文を好む。京城に在りし時と頗る異る」と述べて、永州での創作活動が、長安時代に比して一層活潑になっていたことを自ら明示しているが、それにもかかわらず、重巽との交游を文学と結びつけないで考えている点に、長安時代とかなりの差異が認められるからである。

宋の蘇軾(一〇三六―一一〇二)が「子厚南遷して、始めて佛法を究め、曹溪南嶽諸碑を作る。古今に絶妙なり。儒釋兼ね通じ、道學純備せり。唐自り今に至る、祖師を頌述する者多し。未だ通亮簡正なること子厚の如き者有らず。」と指摘している如く、長安時代、教養として、あるいは社交の具として身につけられていた仏教が、永州の地と巽上人とを得て、はじめて柳宗元自身の心の問題として究められたのである。

かくして「琛上人の南遊するを送るの序」^④では「法の至なる般若より尚きもの莫く、經の大なる涅槃より極まるもの無し。」と自ら重んずる所の仏法・仏經を明示し、さらに「永州龍興寺浄土院を修するの記」^⑤で「遂に天台十疑論を以て牆宇に書し、觀る者をして信を起さしむ。」と述べて、自ら弘法の一端をになうに至るのである。永州の地で作られた南嶽の高僧のための諸碑も、人からの依頼によって書かれていたにせよ、高僧達の遺徳を昂揚することは、やはり弘法に資するものであったろう。反仏教を唱える韓愈によって批難されねばならなかったのは、けだし当然のことであつたと思われる。

なお、以上述べてきた以後の、柳宗元における仏教の深まり、及び貶謫の身であつた日常生活の中でそれがどのよ

うに影響したか等の諸点については、次の機会を得て述べてみたい。

① 柳河東集卷二十五

② 柳河東集卷二十五 ここで柳宗元は、仏教をも含めた諸学の長所を融合し、世に阿らず、隠然と自己の学業を守っている元生を、孔子と道と同じうするものであると評している。

③ 貞元二十一年(八〇五) 正月德宗が世を去り、順宗が即位した。二月、順宗は王叔文、王伾等を任用したが、八月には内禅して憲宗が即位し、たちまち王叔文らは失脚した。王叔文事件とはこのことを指している。なおこの件に関しては、清水茂氏「柳宗元の生活体験とその山水記」(中国文学報第二冊)に詳しい。

④ 柳河東集卷二十五

⑤ 施子愉氏の「柳宗元年譜」(武漢大学人文科学学报・一九五七年第一期)ではこの序を元和六年(八一)、柳宗元三十九歳のときの作品としている。

⑥ 柳河東集卷二十八

⑦ 柳河東集卷十二

⑧ この神道表には「遇亂、奉徳清君夫人。載家書隱王屋山。」とのみ記されて、「三千卷」の数字はないが、柳河東集卷三十、寄許京兆孟容書に「家有賜書三千卷。尚在善和里舊宅。」とある。

⑨ 柳河東集卷十二

⑩ 柳河東集卷十三

⑪ 柳河東集卷十三

⑫ 柳河東集卷六

⑬ 「亡妻弘農楊氏誌」に「凡十有三歳。而二姓克合。奉初言也。夫人既歸。……未三歳。孕而不育。……至干大疾。年始二十有三。」とある。

⑭ 柳河東集卷二十五

⑮ なお、「韓昌黎集」卷三十二の「柳子厚墓誌銘」に「其召至京師而復為刺史也。中山劉夢得禹錫亦在遣中。當詣播州。子厚泣曰。播州非人所居。而夢得親在堂。吾不忍夢得之窮。無辭以白其大人。且萬無母子俱往理。請於朝。將拜疏。願以柳易播。雖重得罪。死不恨。遇有以夢得事白上者。夢得於是改刺連州。」とあって、元和十年(八一五)の量移にとまなう二人の友情はよく知られている。また、このとき劉禹錫に「再授連州至衡陽酬柳柳州贈別」があり、その「重別」詩に「二十年來萬事同。今朝歧路忽西東。皇恩若許歸田去。歲晚當爲鄰舍翁。」(劉夢得文集外集卷七)とあって、貞元九年(七九三)の進士及第以後、全く行動を共にしていたことをものがたっている。

⑯ 宋の王讜の「唐語林」卷一、文學の条に「劉禹錫云。與柳八、韓七詣施士句聽毛詩。」とある。柳八とは柳宗元のことであり、韓七とは韓泰のことである。その時期については、韓愈の「施先生墓銘」(韓昌黎集卷二十四)が貞元十八年(八〇二)十月十一日に施士句の卒していることを記しているから、それ以前であるということまでもない。

⑰ 柳河東集卷二十五

⑱ 劉夢得文集卷七

⑲ 劉夢得文集卷七

⑳ 柳河東集卷二十五

㉑ 柳河東集卷四十二

㉒ 柳河東集卷四十二

㉓ 詩僧と文人との関係、詩僧の性格等について、市原享吉氏「中唐初期における江左の詩僧について」(東方學報京都第二十八冊)に詳しい研究がある。

㉔ 劉夢得文集卷二十三

㉕ 柳河東集卷四十二

㉖ 柳河東集卷四十二

㉗ 韓昌黎集卷三十二柳子厚墓誌銘に「子厚少精敏。無不通達。逮其父時。雖少年已自成人。能取進士第。嶄然見頭角。衆謂柳氏有子矣。」とある。

㉘ 柳河東集卷二十五

㉙ 施子愉氏の「柳宗元年譜」(武漢大學人文科學學報一九五七年第一期)では「南嶽彌陀和尚碑」(柳河東集卷六)を貞元十八年(八〇二)の作とするが、従わない。氏は弥陀和尚(承遠)の歿年を根拠として制作年代を定めたものと思われるが、碑文は、柳宗元の他の諸碑の例から見ても、僧の歿後すぐに書かれるとは限らない。したがってこの碑も蘇軾が「子厚南遷、始究佛法、作曹溪南嶽諸碑」(東坡後集卷十九書柳子厚大鑑禪師碑後)と指摘している如く、他の諸碑と共に永州での作と考える。なお、文暢上人を送る序は、韓愈に「送浮屠文暢師序」(韓昌黎集卷二十)があって、この文との相互の関係において貞元十九年(八〇三)の作と断定しうる。

㉚ 京都大学「中國文學報」第十六冊。寛氏は、山水觀賞の方法、詩の題のつけ方、詩の構成の三点において、柳宗元が謝靈運の影響を受けていることを指摘しておられる。

㉛ なおこの点について少しく述べれば、文暢上人は白居易(七七二-八四六)及び韓愈等とも交游を持っていたことが認められる。白居易については、最近平野顯照氏に「白居易の文学と

仏教」(大谷大学研究年報第十六集)があつて、彼が詩作を通じて上人と交わっていたこと、少なからず上人の薰徳を敬慕していたこと等、詳しく論じられている。韓愈の如く、柳宗元の仏者に接するを責め、はては「論佛骨表」(韓昌黎集卷三十九)を奉って鋭く仏教を論難した人にすら文暢上人との交游が認められるのである。韓愈の場合、他にも多くの僧徒との交游があるが、いずれも素行高潔なること、文章作りに秀でていること等が、交游を結ぶための必須の条件であつたようで、これらのことからしても、文暢上人が仏法をもつて士大夫の間で知られていたというよりも、むしろ文学をもつて著名であつたこと明らかである。

③② 商務印書館ならびに中華書局刊行の活版本は、ともに「道」を「通」につくるが疑わしい。いま「四部叢刊」本ならびに「四部備要」本にしたがう。

③③ 楊憑と同じく弘農(河南省靈宝県)の人である。共に柳鎮と親交のあつた人として「先君石表陰先友記」(柳河東集卷十二)に名をつらねる。

③④ 劉禹錫らと共に施士句に学び、王叔文事件では、やはり共に

貶謫された韓泰のことである。靈徹とは文学的集団を通じての交游であることを証するものであろう。

③⑤ 「又祭崔簡旅櫟歸上都文」(柳河東集卷四十一)に、「楚之南其土不可以室。或圻而類。或确而萃。陰流泄瀉。潏沒滌溢。碩鼠大蟻。傍穿側出。虧疎脆薄。久乃自窒。不如君之鄉。式堅且密。嘻乎崔公。楚之南其鬼不可與友。躁戾佻險。睽睨欺苟。陞賤暗習。輕麗妄走。不思己類。好是羣醜。不如君之鄉。式和且偶。」と述べている。また柳宗元が永州を稱して「蛮夷」ということは「柳河東集」中しばしばにわたる。

③⑥ 前掲清水茂氏「柳宗元の生活體驗とその山水記」及び寛文生氏「柳宗元詩考」参照。

③⑦ 柳河東集卷七。銘文に「雲峯和尚族郭氏。號法證。……凡衡山無與爲比者。然而未有能紀其事。余既與大乘師重巽遊。異其徒也。亟爲余言。故爲其銘」とある。

③⑧ 柳河東集卷三十三

前出註29

④① 柳河東集卷二十五

柳河東集卷二十八